

うねのなぶくやよ
けふこえく

空外上人筆(隆法寺)

隆法寺における別時念仏会への 招待講演をふりかえって

広島大学

教育学博士

衛藤吉則



空外上人

2018年10月13日(土)に、隆法寺の坪倉空幹住職と大学の先輩である荒木光哉先生のご招待で、別時念仏会にて「空外上人と無二の人間形成」と題するお話しをさせていただきました。浅学の私にとって身に余る役割でしたが、山本幹夫先生(空外上人)がおつとめされた隆法寺で「空外思想」について話をさせていただく、というありがたく貴重な体験となりました。住職や奥様はじめ温かく迎えてくださった皆様に深く感謝申し上げます。

隆法寺には、広島大学に赴任する直前の2005年10月に空外記念館を拝観する目的で初めて訪れました。そこで山本先生の所蔵品を前にひとりたたずみ、「これから赴任する母校広島大学で私に何かできるのか」と沈思し、「私たちの倫理学研究室を導いてくださった山本先生の思想にいつの日か光を当てたい」と心のなかで思い描きました。

着任後、その思いを実現するために、住職の許可を得て、空外記念館の蔵書を調査したり、大学の講義で山本先生の主著『哲学体系構成の二途―プロローグ―』、『国家倫理の構造』『念仏の哲学』等を取り上げ、学生たちと読み進めたりしていきました。そしてこのたび隆法寺の本堂で、その成果の一端を披露させていただくという機会をいただくことになりました。本稿では、その空外思想の核心に置かれる「無の思想」の構造を少しだけ振り返ってみたいと思います。



平成30年10月13日 空外記念館別時念仏会・講演会

空外思想の特徴として知られる「無二的人間形成」の「無」について、山本先生はこう語ります。「無への飛躍なしには、いのちの根源（無量寿）へと帰る道はない」と。その言葉の内実は、山本先生が依拠するプロティノスの思想のうちに構造的に示されています。プロティノスは、自らの思想において、プラトニックなイデア（究極の普遍）とアリストテレス的な形相（個物に内在する普遍の相）とを同じ「エイドス」という語で解説します。つまり、彼の理論では、イデア（一者）は私たち個物のなかに「エイドス」として宿り、精神を介した（気づき）の程度に応じて、「形相そのもの」あるいは形相以前の「無形相としての一者（いのちの根源）」に（呼応）し、その性質をわが身の内に体現していくと解説されます。ここでは、内省を通して私たちを善へと突き動かすもの（＝始動因）は「エイドス」であり、私たちが向かう先（＝目的因）もまたエイドスそのものとしての一者となります。実際には、苦悩の先に立ち現れる（不完全さへの気づき（無知の自覚））がこの運動を引き起こします。こうした「一者」をめぐる事態について、プロティノスは『エンネアデス (Enneades)』（301年）においてつぎの言葉をあげて説明しています。山本先生のすべてのものにとつて根源は目的である。∴すべては一者から生じ、さうして一者へ向かふ∴かくして一者はまた善である。叡智は既にその由来せるところの原理へと向かっている。∴個別的精神は叡智的欲求によって自己の来れる根源へ還向する。

（山本幹夫『哲学体系構成の二途—プロティノス解釈試論』目黒書店、1936年、149-151頁）

こうした普遍と特殊の円環運動を支えるのが、「無」という見方になります。この運動において、不完全な私たちが内奥の普遍に呼応するためには、ごさかしい（分別知に基づく「われ」）をなくし、〈真実在への気づき〉を深めることが必須となります。つまり、私たちは、「無知」を自覚し、偏見やエゴを消し去ることで真善美を体現する生命の本来の姿に立ち返ることができると考えられるのです。

ただ、山本先生が体験されたように、近代以降浸透していく分別知は私たちの心の奥底に浸透し、意識的な努力では克服できず、苦悩や精神的な危機をもたらします。こうした状況に対し、山本先生は、近代の「計量的思考」を克服し、私たちが「純化」するためには「非思量」「無量」の道をさらに選びとる必要があると語ります。そして、先生自身、阿弥陀（＝非思量・無量）の行（念仏）に徹し、その真理を覚知されます。そこに、「計量的思考（分ける思考）」を脱した「無二的な生き方」が実現するのです。最後に、「いのちそのものの声」「いのちの根源の声」として、山本が生涯、その言葉とともに思索し、その言葉とともに生きた「南無阿弥陀念仏」の聖意を示唆する自身の言葉をあげて本稿を閉じたいと思います。

真実の自己の声を聴く自己にして、はじめて自己が自己に帰る∴
真実の自己に帰れば、徹頭徹尾阿弥陀の万徳に生かされることに
感動する。（山本幹夫『念仏の哲学』1974年、14頁）

昨年（2018年）の衛藤吉則先生の講演内容については、「無二的人間形成 山本空外上人展」P24～29 一般財団法人 東京大学仏教青年会、又、空外会報37号P18～25をご覧ください。